

The Danube Quarterly

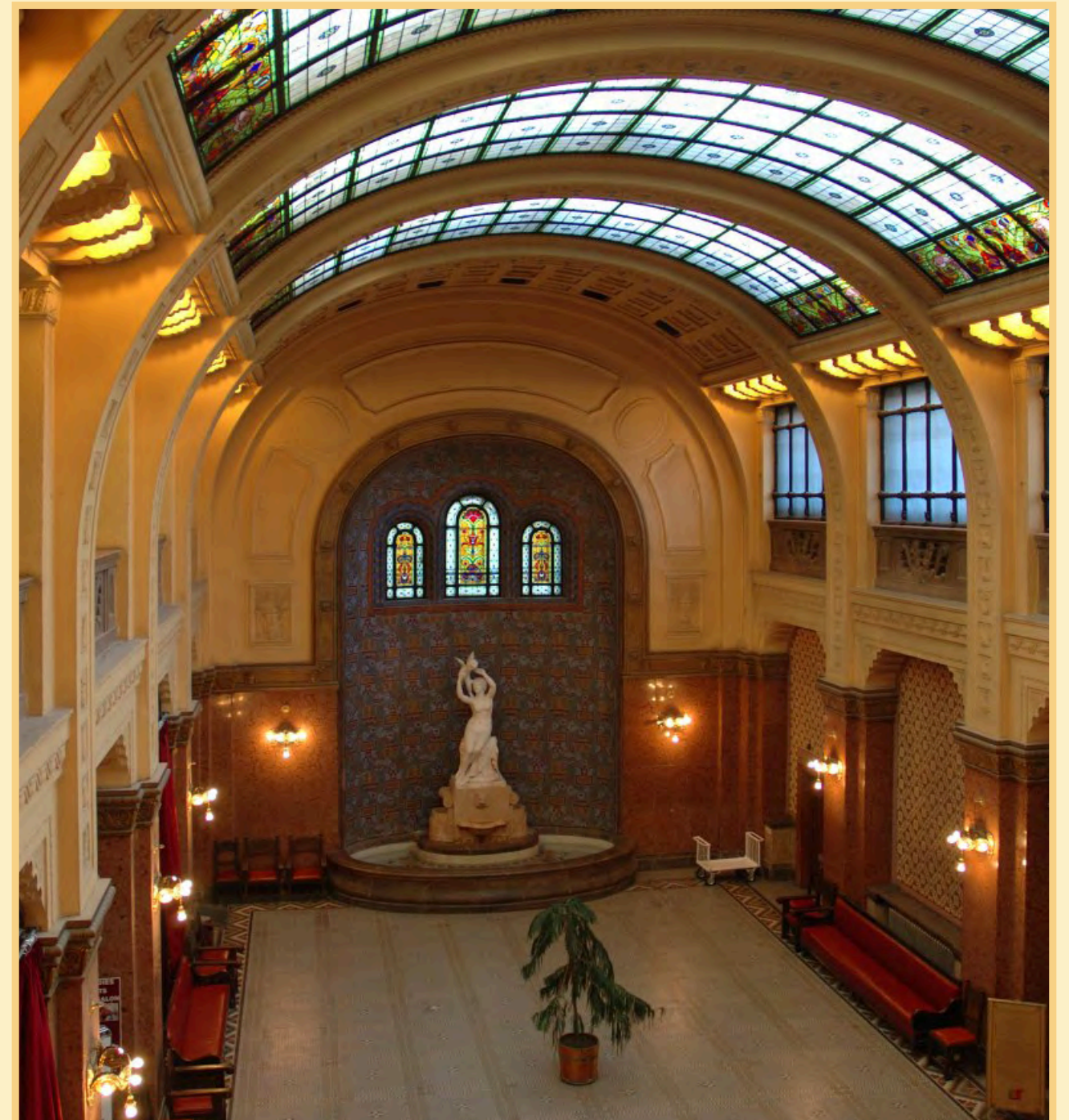
ドナウ通信



2007(平成19)年・春季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



April							May							June						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
1	2	3	4	5	6	7		1	2	3	4	5							1	2
8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
29	30						27	28	29	30	31			24	25	26	27	28	29	30

Cover Illustration Copyright © 2007 by Inner Design Bt, Budapest
Photo copyright © 2007 by Tamás Kármán
Edited by Tsuneo Morita
Published by Japanese Community in Hungary

目次

運動部情報	飯尾 欽哉	1
釣り部報告ー近況報告	関本 正	1
ランニング部ーリレーに出ませんか	盛田 常夫	3
テニス部ー日曜午前の部		4
日曜午後の部		5
ゴルフ部ーハンガリーでの私のゴルフ	前川 昌一	6
日本人学校ー門出のことば		7
木村健・沼田尚子・谷中未沙・谷中理紗・山口智也		
渡邊菜月・野際佳奈・久世優美子・杉田春花・橋本直樹		
中学部答辞	三代 鳴美・八代 大成	9
みどりの丘日本語補習校		
二〇〇六年後回顧	鈴木 史明	14

四年生作文	カルドシュ・イロナ 茂木優 ラバイ 絵梨香	15
五年生作文	伊達クリスチアンネ 守谷 祐貴子 山内 規世美	16
映画評論		
「暗い日曜日」(一九九九年封切り、ドイツ映画)	盛田 常夫	21
創作		
第八話「肩書き」	岩井 孝博	27

運動部情報

長くグルーミーな冬が終わり、不足しがちなサンライトビタミンを吸収するには、一斉に花ほころび太陽のまぶしい春先からのスポーツが一番ではないでしょうか。

春を迎えたブダペストでは、これから本格的なスポーツシーズンが始まります。新春号からそれほど時間を経っていないので、まだ今年度の活動は本格化していませんが、各部とも常連メンバーの帰国というお別れ、新しいメンバーの参加という新しい出会いが始まっています。

ハンガリーでの生活を充実させるために、スポーツを通した可能性を追求してみたらどうでしょう。運動部では皆様の積極的な参加を歓迎しています。

運動部長 飯尾 欽哉

釣り部

近況報告

関本 正

別れと出会い

春は移動の季節です。出会いと別れの季節です。釣り部でも、創部以来一番熱心に活動されてきたM氏が帰国されました。日本でも良い釣りが出来るよう祈念しております。頑張ってください。

さて、出会いの方ですが、今回は豊漁で多くの方に釣り部へ入部頂きました。T氏、I氏、W氏に、紅一点K女史と四名の方に入部頂き、総勢八名(プラス名誉部長で九名)となりました。特に紅一点のK女史には、とにかく野郎だけのがさつな世界と思われている釣りのイメージを変えていく伝道師となって頂く事を期待しております。

マニアック

私の釣りは、海釣りから始まりました。その後、川・沼でのコイ・フナ、溪流のイワナ・ヤマメと進み、二五年前からフライフィッシング(西洋毛鉤釣り)に落ち着いています。この釣りは、ブラッド・ピットのデビュー作「ザ・リバー・ランズ・スルー・イット」で一時陽の目を見ましたが、かなりマニアックな釣りです。

フライフィッシングは竿で糸を前後に振り、糸の重さを利用して毛鉤を遠くへ飛ばすという釣りです。この投げ方はフライキヤスティングと呼ばれてますが、遠投、並びに、毛鉤を如何に決められた場所にキヤスティングするか、の正確性を競う競技会が二〇世紀初めから英、米、仏、独で行われているくらい、キヤスティングそのものの面白さが特色です。また、毛鉤の種類は数千種を超える程あり、鳥の羽、獣毛、毛糸、樹

脂等で毛鉤を自作するのも楽しみの一つです。自分の作った毛鉤に魚が出た時の気分は格別です。

そんなフライフィッシングをやっている私がかれこれ一〇年前からはまっているのは、骨董フライフィッシング道具の収集とそうした骨董品での実釣です。フライフィッシングというのは英国・米国を中心に発展してきた釣りで、今でも英国・米国では一九世紀からの釣具がかなり残っており、そうした骨董品を扱うマーケットも二〇年くらい前から発展しています。私の使う竿は大体一九二〇年〜一九五〇年代の竹竿ですが、そうした竿が何本あるか分からないくらいたまっておりまして、投資した金額を考えるとぞっとします。ただ良いことは、竿が古くなればなるほど希少価値が上がってくる事で、コンディションの良いものであれば買った時の価格より高値で売れます。最近の英国骨董釣具市場の値動きと

ポンドの対円での高騰を見るに、今の市場で売れば一応投資した金額はお釣り付で戻ってきそうだと、何とか自分を納得させております。もっと凄いのがリールで、それこそベントが買えるくらいの高値で取引される骨董リール（糸巻き）も市場にあるくらいです。まあ、そこまで狂っていないので私は持つてませんが。

釣り自体がマニアックなのに、更に骨董品あさりというマニアックな奈落に落ちていった私に救いの道はあるのでしょうか。マニアックな世界に興味のある方、いつでもどうぞ。

今後の予定

以前もご連絡しましたが、五月から一〇月は最低月一回釣行を予定しております。五月、六月の山上湖は心が洗われます。すがすがしい風を感じながら釣りをするいい機会ですので皆様の参加をお待ちしております。釣りの後の宴会も楽しみですよ。



ランニング部

リレーに出ませんか

盛田 常夫

今年の最初のロードレースは。四月二二日のT・C・O・Mレース。日本人からは女性2名と男性2名が、一二kmレースと六・五kmレースに出場します。

五月一九日には女子の大会があり、リレー部(一・五km x 3名)、三・八km、六・五kmの部があります。ジョギングを始めるのに、ちょうど良い距離です。日頃の運動不足を解消するために、この大会を目標にトレーニングしませんか。

六月三日は、恒例のマラソンリレー、ハーフマラソンリレーです。一人七kmを走ります。五百チームが国会周辺の周回コースで競い合います。昨年は女子のハーフマラソンチ

ームを2チーム、男子のフルマラソンチームを2チーム結成しました。今年も、この程度の参加を考えています。昨年、惜しくも一四位に終わった男子Aチームは、今年は十位以内を目指しています。それ以外のチームは完走が目標ですから、誰でもチームに加われます。

個人レースと違い、リレーは和気藹々として雰囲気で、大勢のランナーが一同に介して楽しむ競技になっています。一度走ってみたいという人、是非、声をかけてください。

このリレーの一週間後に、五kmと十kmのタイムレースがあります。秋のハーフマラソン、フルマラソンに挑戦する方は、このレースで力試しされることをお勧めします。

春のウィーンマラソン、秋のブダペストマラソンはいかがですか。どちらも素晴らしい街並みを走ります。ブダペストの国際ハーフマラソン大会は、九月二日、フルマラソン大会

は九月三日です。ハンガリー滞在の記念に、一度、マラソンを走るのはどうでしょう。

ハーフマラソンを走るのは、それほど難しくはありません。完走だけを目標にするのであれば、四ヶ月の準備期間で十分です。そのトレーニングのコツは次の通りです。

最初の一ヶ月。五kmのジョギングを週に三〜四回。これは早足でも良いのです。これで距離への自信を付けます。

次の月には距離を延ばし、週に一度は一〇kmのジョギングを入れます。この月は一〇kmの距離をジョギングできる脚を作ります。

三ヶ月目には、その日の調子に合わせて、五kmと一〇kmのジョギングを組み合わせながら、週に一度は一五kmのジョギングを入れます。一五kmのジョギングができるようになれば、何の問題もなくハーフマラソンは走れます。

テニス部

テニス部は伝統的に、上級者グループと中級・初級者グループが別々にグループを組んで楽しんできました。しかし近年、上級者グループの人数が減り、他方で中級者グループの実力が上がったために、両グループのレベルは接近し、実力的に大差ない状態になっています。また、グループ間の対抗戦などもおこなわれています。

テニス歴の長い人は上級者グループ（日曜午後）、テニス歴の浅い人は諸中級グループ（日曜午前）という目安になりますが、両方のグループに参加しても何の問題ありません。それぞれのグループに顔を出して、一度、どれほどのレベルのか、確認されることをお勧めします。

日曜テニス午前部

日曜テニス午前部は、モスクワ広場に近い「ヴァーロシユマヨリ」テニス アカデミアにて毎週日曜日の午前九時から一時まで二面を使用し、活動しています。メンバーは、二〇代、六〇代までの広範囲の男女一四名で構成されています。

この午前部の発足は、現在の土曜テニス部の下部的位置づけ、つまりもっと練習が必要な方のためであったと聞いていますが、現在では土曜テニス部を凌ぐ人数が集まり、楽しくプレーしています。

テニスを続ける（始める）からには、それぞれに動機があると思います。テニス好き、上手になりたい、運動不足解消のため、たまに行う宴会への参加目的、集まりを通じての情報交換等々。当部には、それらの動機を満足させることが出来ているのか、メンバーの継続率が高いよう

に感じます。またご夫婦での参加も二組あります。

毎週日曜日の練習は、最初の三〇分をアップとして乱打に充て、残りの時間でダブルスのゲーム（試合）を楽しみます。人数が多いこともあり、いろいろな組み合わせや対戦が出来ること、当部の良さかも知れません。

最近では、同じく週末にプレーしている他部との交流戦や、六月にはウイーン、プラハでプレーしている方々との交流戦の企画もあり、テニスを通しての交流が活発化してまいりました。

日曜の清々しい朝の時間帯にスポーツをすることで、平日のストレスも解消、気分転換も出来るので、私にとっては貴重な時間、「リラックステニス」です。



日曜テニス午後部

今年は、例年にない暖かい日々が続いています。テニス部員にとって春の訪れは、テニスコートから白いテントが無くなる頃ではないかな？と思っています。冬のシーズンが終わりを告げ、次のシーズンに向けてコートとの契約交渉が始まります。

先の交流戦では、見事に総合優勝をする等、日頃のメンバーと練習の濃さが結果として表れ、また日頃対戦しないメンバーとの交流で、皆さんのプレースタイルにもポジティブな変化が見られました。

今回はメンバーも少ないので、私なりに部員紹介をさせていただきます。まずは、若手のI橋さん。「鉄壁」と称される程に、ネットプレー（ボレー）が得意な方です。既にゴルフの季節も始まっていますので、二足の草鞋で更なる活躍が期待されます。

続いて、ラグビーのご経験もあるM木さん。ここに来てテニス熱が更に過熱し、積極的なプレーに磨きがかかっています。特にベースラインからのフォアハンド、更に「開眼」した時のサーブは強烈の一言に尽きます。

そして、我らが日曜午後部の「無尽蔵の体力」M木さん。年齢的には部の最年長ですが、そのプレースタイルは四人の中で最も若い方です。また自他共に認めるシングルスプレーヤーとして、その持久力とパワーを活かしたアグレッシブなテニスの特徴。M木さんのプレースタイルが一番光るのはダブルスではなく、やはり“サシ”でみっちり勝負のデスマッチです。

そして私ですが、「オールラウンダー」を目指しているつもりですが、短距離向きなので体力が無く、短期決戦向きかな？と思っています。先般の交流戦では、日曜午後を優勝に

導く事が出来たので、幹事としての面目は何とか保てたと思っています。最後に、四月末から始まる夏シーズンには、「期待のホープ」I来さんが新しく正式入部します。今後、念願の三都対抗戦などの企画もあるので、是非とも一緒に週末テニスを盛り上げていきたいです。



ゴルフ部

ハンガリーでの私のゴルフ

前川 昌一

ハンガリーに来て、早五度の目の春を迎えることとなり、時が過ぎ去るのが、とても早く感じております。こちらに赴任後、一年間は生活、仕事に慣らす時間に費やしており、中々ゴルフへの参加を行っておりませんでした。二〇〇四年の春より、現在のゴルフ部の前身になります日本人有志ゴルフ会に満を持してとは申しませんが、参加させていただくことになりました。

ハンガリーのゴルフ場は、フェアウェア以外は、ラフと一言で言ってしまうえばそれまでですが、殆ど雑草地帯若しくはブッシュといった方がしっくり来る表現ではないでしょうか。特に夏場のラフは非常に深く、

打ったボールも見失うくらい（マジックを見ているよう）、入り込んでしまったら二度と発見できないような場合も多々ありました。その都度、ペナルティーによる二打罰がかなりスコアに影響することもありました。幸運にも、これらの洗札を受ける前に二〇〇四年第二回にハンディキヤップのおかげもありましたが、優勝することが出来ました。

しかしながら、それ以降は、やはりハンガリーのラフ（ブッシュ）の洗札を受けながらのゴルフとなり、スコア的にも一〇〇をきる事が中々できずにいました。言い訳がましく言わせて頂けば、過去も今も月一ゴルフアーであり、まともに練習もせずに参加させて値ただいている恥知らずなものでもあります。

いつも参加させていたたく前は、「今度こそ」と思いつつも、結果順位はほぼ中間より前あたりとなっており、全く持って、過去の反省を行

い、練習すればいいものを殆どやらずに再度挑戦をしている次第です。今年も待ち待った春開幕戦ということで、天候的なコンディションは、やや風があったものの言い訳が出来る状況ではない中で、開催が滞りなくなく行うことが出来ました。

結果といえますと、私は何とか当初の目標であった一〇〇以下を達成することができ、半年振りにクラブを握ったわりには、結果はまずまずといったところでした。（内容は、やはり若干不満な面もありました。）

今年もゴルフシーズンが始まったばかりで、何とか時間を調整し、ゴルフ部の月例に参加を行い、三年前手にした優勝杯を再度この手につかみたいと願っている今日このごろです。



日本人学校

三月と四月は卒業式と入学式の時期です。卒業する皆さんの「門出のことば」を掲載します。

木村 健

僕は今年、最高学年として夏期合宿では協力し合ってカヌーをこいだり、劇を成功させたりできました。クラスには日本にいるときよりもずっと親密な友達もできました。ヴィラーニョシュ校の友達とも一緒に学習しました。多くの経験ができた今、正直ハンガリーに来て良かったと思っています。お父さん、お母さん、ありがとうございます。中学生になってからはハンガリーでしかできないことに積極的に挑戦していきたいと思います。

沼田 尚子

楽しい日が何日も続いた六年間を私はとても大切にしています。私は、人に感謝したり助け合ったりしている人になりたいです。そして、今までできなかったことを自分の力でやりとげていける人になりたいです。入学したばかりのころの小さい手、小さい心が六年間でここまで成長しました。私がここまで成長できたのも、私をあたたく見守ってくれたお母さん、お父さん、先生方、そして友達のおかげです。ありがとうございました。

谷中 未沙

私の小学部最後の一年間は、とても貴重な一年間になりました。これも、ともに過ごした仲間たちのおかげです。六年生は、とても明るく笑いのたえないクラスでした。他の学年の子とは一緒にお弁当を食べ、そ

の後一緒に遊んだことが、とても思い出に残っています。私は、ハンガリーで過ごした、たくさんの楽しい思い出を一生忘れません。今まで私を見守って育ててくれたお父さん、お母さん、先生方、ありがとうございます。さようなら。

谷中 理沙

四年前、私はハンガリーへ期待と不安を胸にやってきました。振り返ってみると日本人学校になってからは、夏の合宿や運動会、文化祭と楽しい思い出がいっぱいできました。特に私は総合の学習で日本とハンガリーの歴史を学習したことが思い出に残っています。たくさんの思い出を胸に、今日 私は日本人学校を卒業します。私は、日本の中学校に進学しますが、ハンガリーで経験したことを忘れずに進んでいきたいと思っています。

山口 智也

僕は、ここブダペスト日本人学校でハンガリーにいるからこそできることを、たくさん経験してきました。日本人学校のみならず遊んでいるとつらいこともすぐに忘れさせてくれました。僕は中学生になるときにはもう日本へ帰っています。僕はみんなと別れるのはさびしいです。もう会えないと思うと涙が出てきそうになります。僕はハンガリーに行く機会をくれたお父さんとお母さん、ブダペスト日本人学校、そして皆さんにありがとうございます。本当にありがとうございます。

渡邊 菜月

私の一番の思い出は百人一首です。優勝をしたかったのに負けてしまったその日が今までで一番悔しかった日です。その日、私は泣いてしまったけれど、心の中で自分の力を出し

切れたことが実感できました。このようにして私は今まで何段もの階段を上ってきました。前向きに取り組める私になったのも家族、先生、そして友達のおかげです。お父さん、お母さん、先生方そして友達の皆さん、こんな元気な私にしてくれてありがとうございます。

野際 佳奈

私の小学部での一番の思い出はハンガリーダンスです。去年よりもいいものにするために上級生として六年生を引っ張り、成功させました。

四月から中学部に行くことは楽しみでも、不安でもあります。その一つが勉強です。中学生になると勉強が急に難しくなるのは不安です。でも新しく始まる英語や技術、美術は楽しみでなりません。中学部でも、はじめたことに責任を持ち、一生懸命取り組みたいです。

久世 優美子

私はハンガリーに来て、ブリティッシュスクールか日本人学校かの選択で迷いました。始めは英語のことも考えてブリティッシュスクールの方が良いと思っていました。しかし、私の心の中は不安でいっぱいでした。そんな時、日本人学校を見に来て、すぐあたたかさを感じました。入学してみると、小さな学校なので、クラスはすぐに全員と親しくなり、いろんな学年の子とも仲良くなりしました。私はそんな学校が大好きです。私の将来の夢は小学校の先生です。

杉田 春花

私は今年度の四月にハンガリーに来て、分からないことや困ったことがありました。そんな時、何も言わずに助けてくれた在校生の皆さん。ありがとうございます。

いつも優しく、そして厳しく御指導して下さいました先生方、ありがとうございます。

ございました。特に応援団の練習では、少人数の中でも協力し、みんなで団結することを学びました。教えていただいたことを忘れずに中学生になれそうです。今までありがとうございました。

橋本 直樹

僕は本当は日本でみんなと卒業したかったです。ハンガリーの学校に転校することが決まってしまうとても残念でした。僕は今年の一月に日本人学校に転校してきました。日本人学校の六年生には男子が少なく、ハンガリーでは野球もあまり人気がないので少しショックでした。でも、もう僕は気持ちを切りかえようと思います。休み時間に友達を誘ってキヤッチボールをして野球をはやらせ、ハンガリーでも楽しく過ごしていきたいです。

中学部答辞

中学部 平成十八年度卒業生

三代 鳴美

この国で迎える最後の冬も終わり、春を感じさせる青空が続いている今日この頃、ブダペスト日本人学校に別れを告げる日がやってきました。

本日は、在ハンガリー日本国大使館付属ブダペスト日本人学校の卒業証書授与式にあたり、向井理事長さまをはじめ御来賓の方々、先生方、二年間共に過ごしてくれた児童生徒の皆様さん、保護者の方々、本日はこのような式を行って頂き誠にありがとうございます。

思い返せば、日本人学校開校の年という、二度とない年に私はこのブダペスト日本人学校にやってきました。あれから二年が経ち、卒業という言葉を意識し始めた後期、卒業に向けて過ぎて行く一日一日がとても

いとおしく感じられました。と同時に私を育ててくれた様々な体験や出会いが鮮明に思い出されます。

この学校が開校してからの二年間、夏期合宿、運動会、ドナウ祭とたくさんさんの行事を体験してきました。私は、この学校に来てからの二年間、常に最高学年でした。日本ではきつとひと事でしかなかった生徒会長や応援リーダーも経験することができました。全て自分で望んだというわけではありませんでしたし、苦労やプレッシャーに押しつぶされそうになったこともたくさんありました。しかし、そんな経験が私を成長させてくれたのだと、今は言えます。それは私を支えてくれた先生方、中学部の仲間、小学部の後輩たちがいてくれたからです。

また、ハンガリーの人々と交流が出来たことは私に大きなものを与えてくれました。私は最後までハンガリー語を話す事はできませんでした。

しかし和太鼓、歌、体育などを通して、言葉を超えて交流することができました。お互い言葉が通じなくても、心を開けば気持ちに通じることを知りました。この体験はこれからの私の人生の中でも大きな宝となるでしょう。

そんな日本人学校での楽しく充実した日々も、今日で終わりです。私は今、卒業する喜びと去っていく寂しさ、そして皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。

八代君。八代君とは開校の年から二年間、一緒に教室を共にしてきました。途中でクラスメイトが帰国してしまい二人だけの学級になりましたが、今日まで楽しく過ごせたのは、八代君のおかげです。文化祭での最後の出し物は、まさに私たちの二年間の集大成でしたね。本当に今までありがとうございます。

中学部の皆さん、今日でお別れだと思うとても寂しいです。しかし

共に笑い協力し、多くのことを乗り越えてきた仲間だからこそ私は決して忘れません。たったの七人、でもこの七人だったからこそ強い絆で結ばれたのだと信じています。これからもあたらしい仲間とすばらしい学校を築いていくってください。

小学部の皆さん。小学生と同じ校舎で一緒に過ごすという貴重な体験ができてうれしかったです。みなさんの素直さ、元気、かわいい笑顔に何度も癒されました。これからも日本人学校の活力でいてください。担任の辻先生をはじめ、先生方。日常の生活や行事など多くの場面で私を助けてくださいました。先生方からは勉強のことだけでなく、多くのことを学びました。先生方が教えてくださったことはこれからも私の中で生き続けます。

お父さん、お母さん。不安も多い生活の中で無事に今日この日を迎えられるのもお父さん、お母さんがい

つも支えてくれていたからです。これから離れて暮らす事は寂しいですがわたしは大丈夫です。みなさんのおかげでこれだけ成長することができましたから。お父さん、お母さんこそお体に気をつけて元気でいてください。

最後に、私はブダペスト日本人学校の卒業生であることを誇りに、皆さんから頂いたたくさんの思い出を勇気に、前を向いて歩んでいきます。これからもこのブダペスト日本人学校のますますの御発展をお祈り申し上げます。答辞とさせていただきます。



中学部 平成十八年度卒業生

八代 大成

早すぎる春の訪れに、自然は戸惑いながらも新しい季節への準備を始めているようです。僕たち初代卒業生二名は、本日、約二年間を過ごしたブダペスト日本人学校を卒業します。二年前の春、友達も知った人もいないこの地での、期待と戸惑いが入り混じった気持ちで迎えた入学式。わずか三十三名でスタートしたブダペスト日本人学校。少人数制や小中一貫、ハンガリーの生徒との合同体育、また小学部との合同行事。どれもこれも日本の中学校とは違う大きな特徴があり、慣れるだけでも数ヶ月を要したものでした。

この日本人学校には別の大きな特徴があります。それは仲間との出会いと別れがとても多い、ということです。十三年間、日本という狭い世界で暮らし、そこでの生活に慣れき

っていた僕は、海外という広い世界での、多すぎるほどの出会いと別れに驚き、残される者として、その無情さに嘆き悲しみました。「会うものは必ず別れる運命にある」という意味の「会者定離」という言葉を嫌というほど実感しました。そしてついに僕は今までの逆の立場である母校を去る者となりました。今、残る者も去る者も悲しみの大きさは同じだということを実感しています。これから先まだたくさんのお会いや別れを繰り返していくと思います。会者定離という悲しい現実も受け止めるなければなりません。しかし、だからこそ、人との出会いやつながりを大切にしていきたいと思います。日本人学校はそのことを僕に教えてくれました。

今、卒業生としてこの場に立つと、様々な思い出が走馬灯のように浮かんできます。宿泊体験学習、夏期合宿といった仲間との楽しい時間は受

験のストレスや不安から僕を開放してくれました。

数ある行事の中で、一番心に残っているのは、ドナウ祭です。第一回ドナウ祭から携わってきたシンボルフラッグ作製に、この学校最後となる今年も貢献できました。また他の学校ではまずできない漫才を、最高の相手、三代さんと披露することができました。そして、なんと書いても忘れられないのは和太鼓。「日本文化の発信」を目標に、およそ半年に渡って練習してきた和太鼓です。坂井先生の熱心なご指導、さらには専門家の方からもご指導を頂くことができ、自分で上達が実感できるたびに大きな喜びを感じました。途中で二人の仲間が帰国してしまったり、何度練習をしてもなかなか息が合わなかったり。そんな苦勞を乗り越え、ドナウ祭直前にやっと全員のリズムが合ってきたときは感動しました。本番の舞台では最後までやり遂げ、

大きな拍手をもらったときは放心状態となり、挨拶を忘れて突っ立ってしまったほどです。

今こうして思い返すと、全ての行事、全ての日々、そして共に時間を共有した全ての仲間たちが、すばらしい思い出になっています。

今日、僕は卒業します。この日を無事に迎えられたのも、今まで僕を支えてくださった方々のおかげです。忙しいのに子供たちのために時間を作り、いろいろなところに連れて行ってくれたお父さん、小さいときから心配ばかりかけてしまったお母さん、十五年間僕を育ててくださいありがとうございました。これから別れて暮らすことになりますが、あなた方の息子として、一人前になるまでどうか見守っていてください。いつか必ず恩返ししたいと思っています。

非常にユニークであり、教育熱心な先生方。先生方のおかげで今では

この日本人学校が今までで一番好きな学校になりました。

そして、唯一のクラスメイト三代さん、先輩後輩の枠を超えて親友になってくれた中学部のみなさん、いつも心を和ませてくれた小学部のみなさん。本当にありがとうございます。皆さんのことは決して忘れません。

僕にとってここで過ごした二年という時間は全てが新鮮な体験に満ちていました。その体験はこれから高校に行っても社会人となっても必ず僕の人生に生きてくると思えます。そしてこのブダペスト日本人学校は今もこれからも、間違いなく、僕の母校です。

いつまでもお元気で。さようなら。



みどりの丘日本語補習校

二〇〇六年度回顧

みどりの丘補習校運営委員会

委員長 鈴木史明

みどりの丘日本語補習校も何とか無事二年目を終えることができました。また、私自身も何とか運営委員長という重責を一年間勤め上げることができました。これも皆様のご支援の賜物と感謝しております。補習校二年目を終えるにあたり、本年度の学校運営状況、成果、課題等についてご報告いたします。

一年生を二名お迎えし、四月に新学期がスタートしました。残念ながら日本へご帰国、他国へのご赴任に伴い、一学期のみの補習校体験でし

たが、二人とも国語の勉強だけでなく、楽しい思い出を作れた有意義な三ヶ月ではなかったかと思っています。

四月の入学式に始まり、九月の日本人学校運動会参加、十二月の学習発表会、一月のカルタ大会など、各行事を通して、昨年より一層たくましくなった子供たちの姿を見ることが出来ました。子供たちの間ではこれらを通じて、学校としての連帯感・仲間意識のようなものが、昨年度よりも強くなった一年ではなかったかと思っています。日頃の学校生活で日本語を使う機会の無い補習校の子供たちにとって、「日本語を話したい!」という欲求を持つことは、国語を学ぶ上で非常に重要だと感じます。その意味で、今年度は非常に有意義な一年であり、こういった楽しい雰囲気は今後も継続して行きたいと思っています。

一方で、休学した生徒が四名出てしまったことは残念でした。補習校の生徒たちは、日常生活で日本語を使う度合に大きな差があります。また、保護者の皆様が補習校へ期待する内容も同質ではありません。そのような中、全てのニーズに応えるためのリソースは、残念ながら当前補習校にはありません。子供たちの日本語レベルや保護者のニーズに合わせて肌理細かく指導をしていくのは非常に難しく、一部の生徒には、効果的な指導が出来なかったかもしれない。これは世界の補習校の宿命であり、永遠の課題だと思います。来年度は今年の反省も踏まえ、皆さんのお知恵を頂戴しながら、教育の質の向上に努力していきたいと思います。

また、授業・教育方針とは別に、学校運営に重大な影響を与えているのが教室・教員の確保の問題です。

現在使用しているツールスペース小学校においては、事前に十分な時間も与えられずに突然教室が使用できなくなる事が、この一年の間に数回ありました。教室の安定確保という点から、別の学校もあたっており、快く使用を許可していただいた所もありました。しかし今の学校に比べ交通の便が悪く、残念ながら実現しておりません。来年度も引き続きT小学校に賃貸をお願いする予定ですが、中長期的な課題であります。

また、教員確保も難しい問題です。毎週土曜日に穴をあけずに一年間授業を担当するのは、とても大変なことでと思います。また、一日の授業に費やす予習の時間も大きな負担になります。そのような中、現在の教員の皆さんは、毎週欠かさず授業を行っていただき、またその指導内容も創意工夫を感じさせるものでした。これまでは幸運にも熱心な教員の方々に恵まれてきましたが、教員の

確保は常に難しい課題です。保護者の皆様、ご支援いただく皆様におかれましても、どなたかお知り合いがいらっしゃいましたらいつでもご連絡をお待ちしております。

最後になりますが、教員への研修など、日本人学校の皆様には大変お世話になりました。また、昨年度に引き続き、日本商工会の皆様からご寄付を頂戴いたしました。この場を借りてお礼を申し上げます。

新年度は四月十四日に始業式を行います。一年生三名を新たにお迎えし、生徒総数十五名により新年度を迎える予定です。本年度の課題、成果を踏まえまして、よりよい補習校にしていきたいと考えますので、本年度同様、皆様のご指導・ご支援を宜しくお願いいたします。



四年生作文

昨年十二月に行われた学習発表会では、谷川俊太郎さんの詩「耳をすます」を朗読しました。

授業では朗読の練習だけでなく、「最近耳をすましたこと」と題して作文にも取り組みました。同じテーマでも

三者三様の見方で、まったく趣旨の異なる作文が出来上がりました。

雨の音

カルドシュ イロナ

雨がふる季節と雨がふらない季節もある。そういう時が好きな人ときらいな人もいる。
たとえば湖に落ちる水の音はいい。

ザーザーとポクポクくり返しふっている。ザーザーふっているけれども、ポクポクふる時もある。レモンやりんごがまじったような雨のにおいがした。そのにおいがとっても好き。鳥と動物は森からまったく出ない。雨が好き。

不思議な目覚まし時計

茂木 優

ねむれない夜。どこからか、チクタクという音。

「どこから聞こえてくるのだろう」
よく耳をすました。すると、まくら元にある目覚まし時計の音だとわかった。

ぼくは、時計の音を無しして、ねようとした。

―チクタクチクタク―
ね返りを打った。
―チクタクチクタク―
学校のことを考えてみた。

―チクタクチクタク―

まだ聞こえてくる。ぼくはだんだんイライラしてきた。なぜ、時計の音は、大ぜいいる時は聞こえなくて、一人でいる時は聞こえるのかな。

どんどん音が大きく聞こえて、ぼくは、がまんがでなくなってきた。一回起きてトイレに行ってベッドにもどったら、なぜか聞こえなくなつた。自然にねむくなってきた。頭の中はからっぽだった。

とつ然目覚まし時計が大きな音でなった。朝になっていた。ぼくは、この大きな音より、チクタクの方がましだと思った。

妹の笑い声

ラバイ 絵梨香

わたしの妹マリナは、二才二ヶ月で、テレビが大好きです。いつも自分で、テレビをつけて、ミスタービーンを見て大笑いしています。

五年生作文

ある朝わたし達が学校に行く前、マリナがテレビをつけたら、またミスタービーコンが映っていて、おもしろいことをやっていたので、マリナはいつもよりもっとはげしく笑っていました。わたし達が宿題をしなればいけない時に、お母さんがテレビを消しても、マリナがまたつけて見えています。

マリナが毎日わたし達を学校に、むかえに来る時、みんなに遊んでもらって、弟の友達といっしょにサッカーをしていることもあります。みんなが小さいマリナのためにわざとボールをけらせてくれるので、マリナは得意そうに大喜びしています。

マリナは、笑ったり、おこったり、泣いたり、感情がどれもすぐくはげしいです。マリナに気を付けるのは本当に大変で、かなりつかれます。でもわたしは、マリナの笑う声が大好きなので、今日もいっしょに遊んでいます。

『物語を作ろう』という単元で、教科書に出ていた何枚かの写真の中から各自一枚選び、それをもとに想像を広げて物語を作りました。

虫とわたし

伊達 クリスチアンネ

かわき。みどりの草の上。みどりの顔と小さい目。かわきとは、わたしの友達、バッタの女の子。

かわきはびっくりした顔をした。何か、この大きい人はだれ？って言ったみたい。わたしは、つかまえた。手の中は黒い。飛んでいきそうに動いていた。わたしは、ゆうへ君に見せた。

「これは、かわき？」
って聞いた。

「これは、わたしのかわきよ。あした、わたしと一緒に学校に行くよ」
って言った。

「えー！学校に？」
とおどろいた。

「うん、先生にも見せてあげるよ」
お母さんにもお父さんにもそう言った。

学校に行った時、先生に見せた。

男の子たちは、

「これは、かわき？」

って聞いてきた。

女の子たちは、

「これ、気持ち悪い」

って言った。でも、わたしと虫は元気だった。

夏まで毎日一緒に遊んだ。でも、夏が終わったらかわきはさびしい顔になった。でも、わたしがしゃべる

とかわきはいい顔をした。わたしもうれしかった。

次の日、もういなかった。お母さんは、

「またあなたに会いに来るよ。だって、かわきとあなたはいつもいい友達だからね」

と言った。でも、わたしは、ちょっとさびしかったのです。お母さんが言ったことは、本当だった。だってかわきとわたしはいい友達。

また春になった。でも、かわきは来なかった。そしてわたしのたん生日がきた。みどりの虫が見えた。わくわく、どきどきした。わたしのかわきがまた来れた。とってもうれしかった！



ナツメと友達

守谷 祐貴子

ひとりの女の子がいました。その子の名前は、ナツメでした。ナツメは無口な性格で、いつもひとりで遊んでいました。ある日ナツメは草原で、ひとりの女の子を見つけました。でもナツメは何も言いませんでした。なぜっていつもひとりでいるので、他の子と話すのがはずかしいからです。

次の日、ナツメはまた草原に行きました。そしてまたあの女の子を見ました。でも、話しませんでした。すると女の子が声をかけてくれました。

「どうしていつも悲しそうなの？」

と聞いてきました。

「だって友達が欲しいんだけど、うまく話せないんだもん」

「それじゃあ、私が友達になってあ

げるよ！」

と女の子は言いました。

「名前は？」

「ハルって言うの。よろしく！」

「私はナツメ。よろしくネ！」

ナツメはともうれしくなりました。だって友達ができたからです。ナツメはいつもハルと遊ぶようになりました。ナツメはだんだん無口ではなくなつて、明るくなってきました。

「今度、動物園に行かない？」

とハルは聞きました。

「うん！行くよ！何時に待ち合わせ？」

「一時ぐらいに動物園で待ち合わせね。」

「分かった。じゃあ、また後でね！」

「うん、バイバイ」

「バイバイ」

ナツメは楽しみでした。

一時にナツメが動物園につきました。

「あっハル！」

「あっ、ナツメ！早く入ろう。待ってたよ！」

動物園でハルとナツメは動物を見たり、ジュースを飲んだりしました。最後にホットドッグを食べて遊びました。もう夕方の六時でした。

「楽しかったね。」

「うん、楽しかったね」

ナツメも言いました。でもナツメは学校が始まるので少しいやでした。

学校が始まりました。ナツメはいつもハルのことを思っていました。

何日かたって先生が、

「転入生が来るので、やさしくしてあげましょう」

とクラスみんなに言いました。

次の日、転入生が来て、

「私、ハルと言います。よろしくお願いします」

ナツメがふと見るとハルがいました。

ハルの席はナツメのとなりでした。

ナツメはそっと

「また会えたね！」

と言いました。

「うん。また会えてうれしい！」

ハルが言いました。休み時間、ハルとナツメは一緒に遊びました。学校が終わった後もナツメとハルは話していました。

何年か経ってハルが言いました。

「ナツメ、私、今度引越しするの」

「えっ！本当に？」

「うん」

「じゃあ、お別れだね」

「うん。今までありがとう」

ハルが泣きながら言いました。ナツメは、

「ねえ、最初に会った草原に行かない？」

「行く！」

草原でナツメはキーホルダーをハルに渡しました。

「これ、私と違って！」

「うん、大切にする！」

ハルが言いました。

「最初も最後もこの草原だね」

「もうお別れだね」

「うん」

ナツメは最後のさよならをしました。ハルもさよならをしました。本当にお別れでした。

それからナツメはいつも草原に言ってハルのことを思っていました。



夏と未々

山内 規世美

「わあ。このお話楽しいなあ」

私はまだ四才。でもお母さんが、

「早く字を覚えましょう」

と言ったから、私は字を覚えてしまった。でも、お姉ちゃんが、

「勉強は大変よ」

と言ったから大変だと思った。けど、とつても簡単だった。私は勉強の時間が待ち遠しかった。私は今、ハイジという本を読んでいる。

じゃあ、今度は家族を紹介するね。

まず、双子のお兄ちゃん達。名前はたくみ・たくやお兄ちゃん。中学二年生だよ。お姉ちゃんの名前は風里、中学一年生。もうひとりのお姉ちゃんの名前は風花だよ。小学六年生。次はお父さん、お母さんとペットを紹介するね。お父さんはサラリーマンだよ。お母さんはお父さんと同じ

会社で出会ったんだって。私達のペットは小さいおさるさんなんだ。あつ、そうそう、お兄ちゃん達の性格、言ってなかったよね。双子のお兄ちゃんは怒られてばかりなんだ。風里お姉ちゃんは頭が良くて中学一年生でトップなんだ。そしてきれいなんだ。風花お姉ちゃんは小学六年生のトップなんだけど、勉強きらいなんだって。これで紹介は終わり。でも、もうちょつとおさるさんの事言わせて。名前はリリ。私に一番なついているの。どうしてかというところ、リリと私は同じ日に生まれたんだ。

夏が来た。私達は別荘へ泊まりに行った。お父さんとお母さんが結婚したお祝いにおばあちゃん達が建てたんだって。私はとってもドキドキした。だって初めて行くんだもん。着いたら私は、とっても気に入った。だってお家が全部クリーム色のものでできてるんだもん。お兄ちゃん達と

お姉ちゃん達、リリと私はきれいに片付いた屋根うら部屋で寝るんだよ。お母さん達はちゃんとベットルームで寝るんだって。となりにお風呂があつて下にはトイレ、はしごがあるんだ。トイレのとなりにはリビング。リビングの形はLになってるんだ。リビングはとっても広いんだ。

次の日、私は別荘の近辺で遊んでいた。でもある日、みんなはやる事があるのに私は無かったから別荘の近辺じゃなくて、もっと遠い所へ行った。そしたら木だけじゃなく野原があつた。野原の横には木が一本あつた。私とリリはここがとっても気に入った。私はハイジの本を持ってきたから、その木にもたれて読んだ。だけど、だんだん眠くなった。リリも私の肩の上で寝ていた。そして、また頭に中にそこと同じ風景が出てきた。その時、ハイジが見えた。そこにペーターと羊もいた。二

人は私を見た。ペーターは何かむすつとしてゐる。でも、ハイジはにこにこしている。そしたらハイジが、「一緒に遊ぼう」

と言ったから私はハイジの手をとった。私はまず自己紹介をした。そしたらペーターが私に笑いかけたから私も笑った。その時、一匹の羊が群れから出てきた。その子は私の足にすりすりしてきた。わたしは少しうれしかった。それから一時間、二時間、三時間と遊んでいた。そうしたらキーキーという声が聞こえた。多分リリが起きたんだろう。だから私はハイジとペーターと羊達に、「さよなら」と言った。それから私は起きて家に帰った。

私はずっとその夢の事を考えていた。みんなはもう勉強は終わっていた。みんな私に怒った声で言った。「どこに行ってたの」

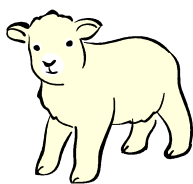
って。私は野原のことを話した。そしたら、風花お姉ちゃんと風里お姉ちゃん、たくや・たくみお兄ちゃんがみんなで、「そこに連れてって」と言ったから、私は「いいよ」と言った。

次の日、家族全員でピクニックに行った。そう、私が昨日行った所。たくみ・たくやお兄ちゃん達は野原でキャッチボールをしていた。風花・風里お姉ちゃん達は向こうでお花のネックスレスを作っていた。お父さんとお母さんはずっとしゃべっていた。私は木の所でリリとお昼寝をしようとしていた。そしたら、やっぱり眠くなって寝てしまった。やっぱりハイジの夢だ。ハイジが言った。「また会ったね」私はうれしくて笑った。ペーターも笑った。羊がメエーメエーと鳴いて

いた。私は疲れるまで遊んだ。そして、
「未々、未々」
という声が聞こえた。けど、起きる気がしなかった。
私が気が付いたらベットの横にいた。風花お姉ちゃんがベットの横にいた。

そして次の日、私は最後の日にカメラを持って行って写真を撮って、お母さんに抱きついて泣き出したんだ。私は、
「また行こうね、絶対だよ」
と車の中で帰り着くまで言った。

それから六年たってやっと思行けた。そして、やっとハイジに会えた。とってもうれしかった



映画評論

暗い日曜日 (Szomorú vasárnap)

(一九九九年封切り、ドイツ映画)

盛田 常夫

日本でも評判になった作品。一時帰国する度に、友人たちからこの映画の話を聞かされた。ブダペストが舞台になっていている物語だが、ハンガリーで上映されたのを覚えていない。どうにかして観たいと思っていたが、最近ブダペストの書店で偶然にこの映画のDVD（ハンガリー語版）を見つけ、すぐに鑑賞した。ハンガリー語版のDVDは二枚組になっていて、付録の二枚目に出演者や主題に関係した人々の各種インタビューが収められている。

日本への一時帰国に合わせて、日本語版もアマゾンで注文し、早送り

で観た。これはドイツ語原版の日本語字幕版で、一枚のDVDに映画とインタビュー編が収録してあった。インタビュー編はハンガリー語版の簡略版である。

ストーリー

ハンガリーの場末のピアニストが作曲した Szomorú vasárnap と題する曲をヒントに作られた、一人の女性と三名の男性をめぐる恋物語。字義通りに訳せば、「悲しい日曜日」、「メランコリックな日曜日」、「鬱陶しい日曜日」になる。Szomorú は「暗い」というより、「鬱な」、「寂しい」という意味合いが強い。人妻への失恋歌として作曲されたものだ。

映画舞台一九三〇年代のブダペスト。ユダヤ人サボー・ラースローが所有するレストランで繰り広げられる人間関係をめぐって物語が展開する。

冒頭シーンは一九九〇年代半ばの

サボー・レストラン。ドイツの客人が妻を同伴して、五〇年振りにこのレストランで会食し、八〇歳の誕生日を祝う。楽団に「暗い日曜日」の演奏を頼むが、その演奏途中に、この客人は心臓発作で死去する。

ここで場面は一転して一九三〇年代。ラースローと恋人のイロナがレストランを切り盛りする。このレストランでピアニストを雇うことになり、アンドラーシュが採用される。飄々とした風情のこのピアニストは、すぐにイロナに恋する。ここから、ラースロー、イロナ、アンドラーシュの奇妙な三名の生活が始まる。イロナは気の向くまま二人の男を行き来する。イロナは二人を自分のものにできるが、二人の男性はイロナを半分ずつしか自分のものにできない。気の良いラースローは嫉妬を感じながらもイロナの自由に任せ、他方でアンドラーシュもイロナを独占しようとはしない。何とも不思議な関係

が続く。

そして、この三人の間に、レストランの客である若いドイツ人ビジネスマン、ハンスが加わる。イロナに一目惚れしたハンスはすぐに結婚を申し込み、一緒にドイツに行こうと誘うが断られ、失意のうちにドイツへ戻る。

アンドラーシュがイロナの誕生日に自らが作曲した作品を贈る。この曲「暗い日曜日」はたちまち欧米でヒットし、この曲を聞いて自殺する者が絶えず、世界的な話題作になる。

それから時が過ぎ、ハンガリーにもナチスドイツが進駐してくる。彼のドイツ人ビジネスマン、ハンスはナチスの将校としてブダペストに派遣され、ラーズローのレストランの常連客となる。ある日、ピアノストの「暗い日曜日」を弾くと命令するが、彼を嫌うアンドラーシュは演奏を拒否する。銃で脅すのを見たイロナはアンドラーシ

ュに駆け寄り、アカペラで歌いだす。歌わないと断言したはずのイロナは、歌い終わると足早に調理場に去るが、その瞬間、銃弾の音を聞く。アンドラーシュがハンスの拳銃を手に取り、自らの命を絶つたのだ。

アンドラーシュが亡くなり、三人の奇妙な生活に終止符が打たれたが、残った二人には深い悲しみと虚しさが残る。

ブダペストではナチスドイツによるユダヤ人排斥が強まり、やがてラーズローも追放対象に上る。逮捕が間近いと感じたラーズローは手紙と毒薬を手にするが、その途端にドイツ兵がレストランに入り込み、ラーズローを連行する。イロナはラーズローを助けるべく、ハンスが陣取るナチスドイツ司令部の館へ向かう。ソ連軍の接近で劣勢になった司令部は撤収作業を終え、ハンスが残務処理で一人館に残っている。そこに現れたイロナに、ラーズロー救出の口

約束を与え、エリカの体を奪う。

舞台は東駅。ユダヤ人たちが貨車に乗り込むところへ、ハンスが免罪の書状を持って現れる。しかし、彼が助けたのはラーズローではなく、ナチの役に立つ学者だった。

それから間もなく終戦となるが、イロナはラーズローの子供を身ごもっていた（この息子の父親はハンスかもしれない）。この息子がサボー・レストランの二代目として、レストランを取り仕切っている。そして、今、五〇年振りにレストランに現れたのが、母を騙し、父を収容所送りにしたドイツの客人ハンスだった。彼の皿にラーズローが残した毒が盛られ、母と息子は復讐に成功する。

テーマと脚本

脚本はニック・バルカウによる小説（一九八八年）にもとづくが、原作はラーズローとハンスの葛藤を描いたもので、イロナの存在はない。

ロルフ・シュューベル監督による脚本。

ドイツ人ハンスに復讐するという映画の筋書きはいわば落ちのようなもので、冒頭シーンと最後のシーンを繋ぐ役割をもっているが、映画全体の本筋には関係なく、話を締めくくるための道具だ。主要なテーマはイロナとラーズロー、アンドラーシュをめぐる三角関係。この不思議な三角関係に、一九三〇年から一九四〇年代の歴史が重ねられ、ドイツ人ハンスが入り込む。

欲を言えば、この時代の雰囲気をもっと醸し出す構成が欲しかった。メランコリーな雰囲気醸し出す工夫が不足している。主題曲と自殺の流行を媒介する舞台設定がもっと必要だった。そうすれば、創り話的な印象をもっと払拭することができただろう。

時代背景

映画全編を通して流れる主題曲

「暗い日曜日」は、ハンガリーのピアニスト、シェレシュ・レジュー作曲（一九三三年）になるもの。これがフランスのシャンソン歌手ダミアンによって歌われたことからシャンソンとして世界的に知られることになり、以後、数多くの欧米歌手がさまざまな編曲で歌い、日本では淡谷のり子を初め、シャンソンを専門とする歌手が歌っている。

巻末に掲載した通り、セレシュの原曲には彼の作詞が付されており、「世界の終わり」と題されている。

「Szomorú vasárnap」と題する作詞は、ハンガリーの新聞記者ヤーヴォル・ラーズローが付したもので、テーマは同じ失恋と絶望である。

シェレシュは現在も営業しているブダペストのレストラン、キシュピパ（Kispipa）などのレストランで

この曲を弾いていた。先行きが不透明な一九三〇年代の憂鬱が感じられるメロディは多くの若者の心を捉え、

自殺へと導いた。歌詞そのものは失恋の絶望を歌ったものだが、ナチスドイツの支配へ向かうヨーロッパは何とも言いようのない閉塞感で満ちており、展望が開けないもどかしさに、若者たちが絶望し、死を選んだのだろう。

作曲家シェレシュ本人も一九六八年に自殺するが、これは癌を患ったこと。多くの国で演奏禁止の曲に指定された。戦後の社会主義ハンガリーでは西欧かぶれした音楽の演奏が禁じられ、場末のレストランの楽士たちにも演奏禁止曲リスト一覧が配られていたという。その中に、この「暗い日曜日」も含まれて、長い間、ハンガリーでは演奏が禁じられていた。シェレシュは客が帰って静まったレストランで、一人のこの曲を弾いていたという。

ドイツと日本の差

悪役ハンスを演じたベン・ベッカ

ーは、脚本を読んでこの役に乗り気でなかった。過去の事実在即したものとはいえ、自らの民族の醜さを映画にするという発想は、今の日本人にはないだろう。この映画はドイツ人監督によるドイツ映画である。

日本の過去の侵略を描くことが「自虐史観」と批判され、「南京で日本軍が三〇万人を殺したのは嘘」、「慰安婦に軍は関与していない」、「沖縄自決を軍は強制していない」などという政府や与党議員の「言い訳」だけが先行する日本では、民族の愚行を映画文化の中で描く精神的な余裕はない。三〇万人は根拠薄弱だとしても、数万人の虐殺なら許されるのだろうか。軍が実質的に関与せずに慰安婦事業が存続するはずがないではないか。形の上で強制がなかったことを主張することにどれほどの意味があるのか。そういう詰まらぬ言い訳が先行する歴史観こそが問題だということが分らないのだ。

ナチスドイツの贖罪を背負って戦後の建国を進めたドイツと、原爆による敗戦で被害者意識だけが残りの侵略と虐殺の歴史を忘れた日本との決定的な違いは、映画文化にも現れている。

俳優たち

それにしても映画制作とは奇妙なものだ。主役を演じるマロジャー・ン・エリカはハンガリーの舞台女優、ラースローを演じるヨハイム・クロールとカーンを演じるベツカーはドイツ人俳優で、ピアニストのアンドラーシュを演じるステファノ・ディオジニはイタリア人俳優。原版はドイツ語だが、ロケーションではそれぞれが母語で演じているはずだ。ドイツ語版にしてもハンガリー語版にしても、吹き替えが旨くできていて、どちらも皆同じことばで会話しているように見えるから不思議だ。それぞれの短いカットで、ストーリーを確

認しながら演技しているので違和感はないのだろう。オペラでも、ゲスト歌手が原語で、現地の歌手が現地語で歌うこともあるから、それと同じことか。

マロジャー・ン・エリカはこれが最初の映画出演だった。監督の抜擢に応え、この映画でドイツの各種の映画賞を受賞し、一躍国際的に名を知られることになり、以後、サボー・イシュトヴァーンの映画に起用されるなど、映画への出演が多くなった。ハンガリー語版のDVDに収録されているインタビュでは各俳優が皆化粧なしのすっぴんでインタビュに答えている。ここで見るエリカはふつうのハンガリー人女性。街で見かけても、気づかないだろう。俳優とは何とも不思議な商売だ。

同じことはディオジニについても言える。素顔はかなり粗が多いが、銀幕のイロナとアンドラーシュははるかに魅惑的だ。エリカは色気のある

る魅力的な女性をうまく演じているし、デイオジニは実際にピアノが弾ける。映画でも彼が実際にピアノを弾いている。それを含めて孤独な芸術家の痩せ男役をうまく演じている。屋外ロケーションはすべてブダペストだが、レストランはドイツのケルンにあるスタジオ内に作られたもの。一見して、グンデル・レストランを小規模にした印象を与えるが、ハンガリー人建築家が制作したものだ。ブダペストのレストランを借り切ることも考えられたが、制作資金を提供した篤志家の要望に応じて、ケルンに建設されたそうだ。

ハンガリー語版（ドイツ語字幕あり）のDVDは四五〇〇Ft、日本語版（ドイツ語原版、日本語字幕）のDVDはamazon.co.jpで四九三五円（中古品が四〇〇〇円から購入可）である。ドイツ語かハンガリー語を勉強したい人はハンガリー語版を購入されることをお勧めする。

「暗い日曜日」原譜

Hinden jog fenn tartva.

VÉGE A VILÁGNAK...

A Szomori Vasárnap új vers változata Szeress Rézső verse és zenéje

Adagio

05

Az van és peregetek a sárgult levelek, Meghallt a földön az emberi szeretet.
Vége a világnak, vége a reménynek, Városok pusztulnak, aranyok zsendnek.

Bánatos könnyekkel zokog az évi szél. Szomori új történet nem vár és nem remél. Milyen sűrű és hideg szomori.
Embernek vértől purus a farska rélt. Haláluk felcsendek az éjben szorított lélegzetű álomokba csorog az éjszaka.

Szűk a len, rússok és káposzta az emberek... Meghallt a...
Uram az emberek gyöngy és nyaklánc...
Vé-ge, a...
A-lá-g-nak!

SZOMORI VASÁRNAP...

Szomori vasárnap száz fehér virággal,
Várta az üdvözletet keményen imádván.
Milyen kár! Kétségbe esett vasárnap allelőlt.
Bánatom hirtelen mekkora visszaélt.
Azóta szomori mindig a vasárnap.
Kényen csak az italban, káposztában bánat.
Szomori vasárnap.

Utolsó vasárnap kedvesem gyere el,
Pap is lesz, káposztát, reméltem a szőlővel.
Milyen kár! Kétségbe esett vasárnap allelőlt.
Virágos fák alatt utam az utolsó.
Milyen kár! Kétségbe esett vasárnap allelőlt.
Milyen kár! Kétségbe esett vasárnap allelőlt.
Szomori vasárnap.

Jóvá-László verse.
R. L. Neményi F.

Copyright 1946 by Csárdás Budapest-New-York, La 2019

「暗い日曜日」歌詞

ヤーヴォル・ラースロー作詞

仮訳 盛田

*Szomorú vasárnap
száz fehér virággal
vártalak kedvesem
templomi imával.
Álmokat kergető
vasárnap délelőtt,
bánatom hintaja
nélküled visszajött.
Azóta szomorú
mindig a vasárnap,
könny csak az italom,
kenyerem a bánat.
Szomorú vasárnap.*

*Utolsó vasárnap
kedvesem gyere el,
pap is lesz, koporsó,
ravatal, gyászlepel.
Akkor is virág vár,
virág és - koporsó.
Virágos fák alatt
utam az utolsó.
Nyitva lesz szemem, hogy
még egyszer lássalak.
Ne félj a szememtől,
holtan is áldalak...
Utolsó vasárnap.*

悲しい日曜日
百の白い花束で
君を待つ
神への祈りを込めて
夢を追い続ける
日曜日の昼下がり
悲しきブーメラン
君なしで戻ってきた
それから続く悲しみ
日曜日はいつも
飲むことだけが心を癒し
苦しみを糧とする
悲しい日曜日

最後の日曜日
君よ来たれ
牧師も、棺も
霊柩車も、喪章も
花も待っている
花と、そして棺も
花開く木々の下で
それが私の最後
眼を見開き
もう一度君を見たい
私の眼を恐れるな
死しても君を愛でるのだ
最後の日曜日

第八話「肩書き」

岩井 孝博

ピーヒヤラ・トン

ピーヒヤラ・トン

ピーヒヤラ・ピーヒヤラ

ピーヒヤラ・トン

エー、毎度読みづらいコーナーへのお付き合ひ、まことに有り難う御座います。

料理学校出たから、俺は調理師だ。だとか、車の運転免許があるから、運転できる。

なるほど、確かにそれに違い御座いません。

肩書きは取れる時に取っておけ、中味は後から付いて来る。

肩書きに、経験という中味を付けるわけですが、経験と肩書きのバランスが、なかなか取り難いのも、ま

ッ、人生。

板前になって五年生のグミ助、二度調理師試験に失敗し、経験はあるけど、肩書きがない。

海の魚を真水で洗えば生でも食べる

こんな当たり前の事を

腸炎ビブリオ菌は、真水で洗浄する事。

なんて、肩書きのある新人に言われた日には、腸炎が延長でも、ビブリオがデカプリオでもいい、手めエでやれ、なんて、どやしたくなるもんです。

でも、どやしたり、引っぱたいたりすれば、やれハラスメントだ差別だ暴力だって、事情はともかく世間が騒ぐ。

グミ助、その悔しさを、聞いて欲しくて、ガム公の住んでるチョコ坊のマンションにやってきました。

マンションの裏手が山並み、表通りが海岸に面している。

グミ助、そこまで来て、しばらく海を眺め、マンションを眺めて、はアッと溜息をつき

「情けねエなアー、新座者に、能書き言われ：肩書きあるから仕方ねエが、ハイって言ってる自分が情けねエ」

とか何とか言いながら、前を行ったり来たりしてたんですが、吹かれたように、マンションに入っていく。

誰でも、このオ胸ン中にあるいやな事を、誰かに言いますと、何か胸がスツキリする、って事があります。

行くと、チョコ坊は外出中。ガム公は横ンなって、テレビで〇〇七かなんかを見ている。

その姿をボーッと見ながグミ助が「いいな、のんきで」

なんて言ったもんですから、横になつていたガム公が、ガバツと起きて

「何がのんきなんだ」とグミ助を睨みます。

睨んだまでは良かったんですが、その姿を見ると

「どした、お化け見てエーに突っ立って、生きてんのか」

するとグミ助が、いきなり膝を折り、ひしゃげた蛙のように座りこむと

「おれ、情けなくってさ」

「なにが、どうしたんだ」

言って聞かれて、わけを話せば、ガム公の兄ィが腕組み辛抱、じっと考え

「板前、職人の一番辛れエーところだ」

グミ助、へ、と顔を上げた。

ガム公が爪をいじりながら、くぐもった低い声で

「知ってたか、久治朗親方、免許なんざ持ってねエ」

グミ助、又も、ヘッとなつて、首を前に出し、目パチクリ。

「んな、俺を励まそうって、気は嬉しいが、見えすえた冗談じゃ、シ

ラケ鳥がピーチクパーだぜ兄ィ」

「ん、だが本当だ、むかし、高知のカツ節職人で、カツヲを五枚下ろしにするのが、人の三倍速いと、親方の知人から聞いた。俺が小僧で、今の活春に入った初夏五月。初カツヲが入荷し、まな板を前にした親方の前に、銀皮向うで頭が右、カツヲが置いてある。

アレツて思ってた俺に、素焼き八寸だつて言った親方の目が、ピカーッと光ったのを今でも覚えてる。びつくりして八寸取りに行つて、ワクワクしながら戻ってきたら、もう刺身が出来ていた。ものの一分もかかったかどうか」

ガム公、生唾をゴクリと飲み、顔を上げ、視線を上に向け、静かに目を閉じ、はく息に声を乗せたような声音で

「神技つてなア、あの事だな」とつぶやいた。

別人になったようなガム公にグミ

助の目が張り付いた。

ガム兄ィの目尻に光る一筋。

グミ助、ザザッと畳を蹴って座り直した。

「兄ィ、俺が馬鹿だった」

「じゃねエが、慌てもんだ」

ここでグミ助、三度の、へ。

「中味のねエ肩書きで、いくら着飾っても、底が浅エからすぐバレル。

これじゃ金も女も着いちや来ねエ」言葉を切つて、ひよいと気が着くと、グミ助がいらない。

「グミ、トイレかあ」

「こ、ここにいろ……」

蚊の鳴くような声がガム公の後ろでする。

グミ助、部屋の隅で平蜘蛛になつて泣いている。

「ま、いい、久保田の万寿、冷え頃だ、持ってこい」

グミ助が涙と鼻水を掌でぬぐいながら立っていきます。

「おい、手エ洗ってからもってこ

いよ」

勝手知ったる他人の家。

櫛型レモンの小鉢、荒塩の入った小鉢、小皿に檜の一合枡を乗せ、運んでいきます。

用意の出来た日暮れ時、どこかで蟬の音がする。

「グミ助、親方が板前仕事してるの、見たこと有るか」

「あるさ、とにかく手際がいいって言うか、何でも切り裁いて行く」

「そうじゃねえ、鍋前の事だ」

「鍋前かア：：ねエな」

「だろ、解るか、その意味」

冷えた枡酒をキュツとやって、荒塩をカリツと嘔んではコンニャク問答の二人。

枡からこぼれた小皿の酒をツツとすすってグミ助

「ねエな、どういうことだ、兄イ」

「包丁人だからさ」

「：：だからって：：」

「車の教習所には教官がいる、ス

ポーツにはコーチがいる。教官やコーチは生徒や選手に技術を教えるんだろ。その技術をどう使うかは、選手や生徒のかってだろ。違うか」

「そらア、そうだが、それと包丁人と、いったいどんな関係があんだい」

「この野郎、酔って来やがったな、深酔いしねエうちに言うから、耳いかつぽじいて、よつく聞け」

「兄イだって酔ってんじやねエか、なんだい、その巻き舌」

「るせエ、包丁人てなアな、教官やコーチと同じだ。言ってみりゃ、板前に包丁の磨ぎ方とか使い方を教える教官だ。」

「でもよオあの教官、自分で仕事はしても、教えてくんねエぜ、なんでだい兄イ」

「知リエ事を、聞けばいいじゃねエか、聞かねエから、言わねエだけさ」

「何、聞けばいいんだ」

「こッからだな、馬鹿と利巧の差が出るのは」

「どんな差だ」

「聞きてエ事が多い奴ほど利巧ってこった。プールサイダーになって見てるだけじゃ、美味しい物はお世ねエ。切ったハッタは包丁人だが、美味い不味いは板前仕事だ」

「頭、ゴチャゴチャしてきた。」

プールサイダー、なんだア、三ツ矢サイダーとかラムネなら知ってるがよ」

いよいよ酔ってきた二人。

チョコ坊が、外から帰ってきてみれば、奥で二人の音がする。

ああ涼風に誘われて冷酒だね、それじゃおでんが丁度いい。

台所へ入って、出来合いのおでんの袋を切って鍋に入れ、コトコトやります。

こう気の利いた女性を女房にしたんですが、なかなか。

和ガラシをぬるま湯で練る。カツ

ヲ風味の即席出しに昆布茶を入れる
と、何とも言えない日本の香。大き
な盆に鍋ごと乗せ、取り皿、和ガラ
シ、レンジをそろえ、奥へと運ぶ

「お、帰エってたのかい」

「知ってたくせに：」

「ん、まアな」

「始まった、おでんより熱いじゃ
ねエか、お二人さんよ」

「帰りがけ、つい買っちゃったけ
ど、よかった、さ、グミちゃんもど
うぞ」

「どうぞって、兄イには袋と筋で、
俺にはでーこんか、二人して、好き
にやってくれ」

グミ助、二人にかまわずカラシを
塗って大根を頬張った。

「ああ美味めエ、美味めエけど、
やっぱ違うな」

「グミちゃん、食べながら何言っ
てるの、食べてから、ユツクリお話
よ。何が違うって」

フーハーいいながら飲み込んだグ

ミ助

「あのさ、親方が桂剥きして、残
った大根をよ、俺がたまに炊き込む
んだ、荒炊きだったたり、おでんだっ
たりなんだが、どうも何かが違うん
だ。これと」

言いながら食べかけの大根を顎で
さす。

ガム公、頬を崩して

「解ったか、そこだそこ」

「そこって、どこだ」

「大根だ大根、骨エ張って思い出
せ、親方の大根とこの大根、

どこが違う：ん、グミ」

グミ助言われて、大根をジーツ
と、穴が空く程睨み

「ザラツキがある、親方のはない」

「よし、それでいいグミ、お前エ
の大根と、この大根、同じだろ。親
方のとは、違うだろ」

「ん、ああ、でも」

「どっから来るか解るか」

「解らん」

「包丁の冴えと使い方だ」

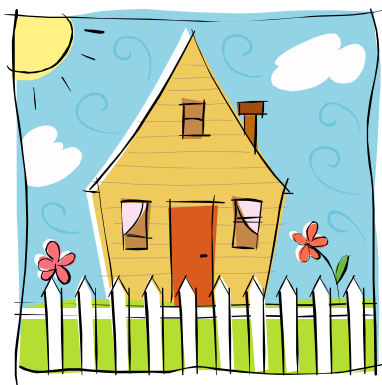
「ナイフかア：」

「バカ、和包丁とブリキナイフ、
一緒にすんじやねエ、そんなこっち
や、肩書きのほうで、二の足踏んで
らア」

ピーヒヤラントン

ソロソロ一服、アラドッコイー

おわりー



「ドナウ通信第 71 号」（2007 年春季号）

発行者 ハンガリー日本人会

発行年月日 2007 年 4 月 15 日

発行代表者 田路 亮三

編集責任者 盛田 常夫

表紙デザイン さくらデザイン (Inner Design Bt.)

1021 Budapest, Bogár utca 7

写真・裏表紙デザイン Kármán Studio Bt.

日本人会事務局 連絡先

Magyarországi Japánok Szervezete

TEL/FAX: +(36-1)373-0400

1054 Budapest, Zoltán u.13

P.O.Box: 638 H-1365

E-mail: nihonjinkai@nihonjinkai.hu

ドナウ通信編集部

TEL/FAX: +(36-1)361-4469

E-mail: morita@tateyamahu